

海神別莊

泉鏡花

青空文庫

時。

現代。

場所。

海底の琅玕殿。

人物。

公子。沖の僧都。（年老いたる海坊主）美女。博士。

女房。侍女。（七人）黒潮騎士。（多数）

森しんげんらんぺき 藍碧なる琅玕ろうかん殿裡でんり。黒影こくえいあり。——沖そうずの僧都。

僧都 お腰元衆。

侍女一 (薄色の洋装したるが扉ドアより出づ) はい、はい。これは

御僧おそう。

僧都 や、目覚しく、美しい、異かわった扮装いでたちでおいでなさる。

侍女一 御挨拶ごあいさつでございます。美しいかどうかは存じませんけ

れど、異かわった支度には違いなのでございます。若様、かねて

のお望みが叶かないまして、今夜お輿こし入いれのございます。若奥様が、

島田のお髪ぐし、お振袖と承りましたから、私わたくしどもは、余計そのお

姿のお目立ち遊ばすように、皆して、かように申合せましたの

でございます。

僧都 はあ、さてもお似合いなされたが、いずこの浦の風俗じやろうな。

侍女一 度々海の上へお出でなさいますもの、よく御存じでおあんなさいましょうのに。

僧都 いや、荒海を切つて影を顕すのは暴風雨の折から。如法

たいてい暗夜じやに因つて、見えるのは墓の船に、死骸の蠢く裸体ばかり。色ある女性にしようの衣などは睫毛にも掛りませぬ。

さりと小僧のみぎりは、蒼い炎の息を吹いても、素奴色の

白いはないか、袖の紅いはないか、と胴の間、狭間、帆柱の根、

錨綱いかりづなの下までも、あなぐり探いたものなれども、孫子は措

け、僧都においては、久しく心にも掛けませいで、一向に不案内じゃ。

侍女一（笑う）お精進しょうじんでおいで遊ばします。もし、これは、

桜貝、蘇芳貝すおうがい、いろいろの貝を蕊しべにして、花の波が白く咲き

ます、その渚なぎさを、青い山、緑の小松に包まれて、大陸の婦たちおんな

が、夏の頃、百合、桔梗ききょう、月見草、夕顔の雪の装よそおいなどして、

旭あさひの光、月影に、遙はるかに（高潤こうかつなる碧瑠璃へきるりの天井を、髪つや艶やか

に打仰ぐ）姿を映します。ああ、風情な。美しいと視ながめました

ものでございますから、私わたくしども皆が、今夜はこの服装なりに揃えま

した。

僧都 一段とお見事じゃ。が、朝ほど御機嫌伺いに出ました節は、

御殿ごてん、お腰元衆、いずれも不断の服装なりでおいでなされた。その節は、今宵、あの美女がこれへ輿入の儀はまだ極きまらなんだ。じたい人間は決断が遅いに因つてな。……それじゃに、かねてのお心こころ掛かけか。弥疾いやとく装なりが間に合うたものう。

侍女一　まあ、貴老あなたは。私わたくしたちこの玉たまのような皆みんなの膚はだは、白い尾花の穂を散らした、山々の秋の錦にしきが水に映ると同じおんなに、こうと思えば、ついそれなりに、思うまま、身よその装おいの出来ます体たいでおりまするものを。貴老はお忘れなさいましたか。

貴老は。……貴老だとして違いはしません。緋ひの法衣ころもを召ひともとそうと思えば、お思いなさいます、と右左、峯ひともとに、一本燃立つような。

僧都 まま、ま、分つた。(腰を屈めつつ、かが 圧おさうるがごとく掌たなを拳

げて制す) 何とも相済まぬ儀じや。海すまいの住居ありの難がた有なさに馴なれ

て、かげひなた 蔭日向、雲ゆききの往來うしおに、潮うしおの色いろの変かはると同様。如意によいじざい自在じざい心

のまま、たちどころに身よその装おの成なりる事を忘れていました。

なれども、僧都が身は、こうした墨染やみの暗夜やみこそ可よけれ、なま

じ緋こころもの法衣まなど絡まとおうなら、ずぶ濡ぬれの提ちよう灯ちんじや、戸とまど惑どを

したえいの魚うおじやなどと申まそう。圧おしも石いしも利きく事ことではない。(細

く丈長くろがねき鉄かの錨かりを倒さにして携つえたる杖えを、軽かろく突つ直ちす。)

いや、また忘れてはならぬ。忘れぬ前ま前に申ま上げたい儀ぎで罷ま出で

た。若様へお取次を頼たみましょ。

侍女一かしこま 畏かしこまりました。唯ただ今いま。……あの、ちようど可い折せに存ぞんじ

ます。

右の方かたア闔を排して行く。

僧都 （謹みたる体ていにて室内みまわをす。）

はあ、争われぬ。法衣ころもの袖に春がそよぐ。

（錨の杖いだを抱いだきてたたずイむ。）

公子 （衝つと押す、闔ドアを排ひらきて、性急に登場す。面玉おものごとく藤ろう

丈たけたり。黒髪を背さばに捌さく。青地錦ひたたれの直垂こがね、黄金こがねづくりの劍つるぎ

を佩はく。上段、一階高き床の端に、端然として立つ。）

爺じい、見えたか。

侍女五人、以前の一人を真先まつききに、すらすらと従い出づ。い

ずれも洋装。第五の侍女、年最も少わかし。二人は床の上、公子こうし

の背後うしろに。二人は床を下りて僧都の前に。第一の侍女はその背うしろに立つ。

僧都 は。(大床おおゆかひざまずに跪く。控くえたる侍女一、件くだんの錨いかりの杖ぼうを預る)

これはこれは、御休息の処を恐入りましてござります。

公子 (親しげに) 爺い、用か。

僧都 紺こんじょう青あお、群ぐんじょう青あお、白びやくぐん群ぐん、朱しゆ、碧へきの御蔵ごくらうの中より、

この度の儀に就きまして、先方へお遣わしになりました、品々たぐいの類と、数々を、念のために申上げとうござりまして。

公子 (立ちたるまま) おお、あの女の父親に遣やつた、陸ゆいで結むす

納うとか云うものの事か。

僧都 はあ、いや、御聡明なる若様。若様にはお覚おぼえちが違ちがいで

ざります。彼等夥間なかもに結納と申すは、親々が縁を結び、媒妁人なこうどの手をもち、婚約の祝儀、目錄を贈りますでござります。しかるにこの度は、先方の父親が、若様の御支配遊ばす、わたつみの財宝のぞみに望を掛け、もしこの念願の届くにおいては、眉目容色みめきりよう世に類たぐいなき一人の娘を、海底へ捧げ奉る段、しかと誓いました。すなわち、彼が望みの宝をお遣つかわしになりましたに因つて、是非に及ばず、誓せいごん言の通り、娘を波に沈めましたのでござります。されば、お送り遊ばされた数の宝は、彼等が結納と申そうより、俗に女の身代みのしろと云うものにござりますので。

公子（軽く頷うなずく）可よし、何にしろすこしばかりの事を、別に知らせるには及ばんのに。

僧都 いやいや、鱗一枚、一草の空貝とは申せ、僧都が承
 りました上は、活達なる若様、かような事はお氣煩かしゆうお
 いでなさりましようなれども、老のしようがに、お耳に入れね
 ばなりませぬ。お腰元衆もお執成。とりなし（五人の侍女に目遣す）
ひら平にお聞取りを願わしゆう。

侍女三 若様、お座へ。

公子 （顧みて）椅子をこちらへ。

侍女三、四、兩人して白き枝珊瑚の椅子を捧げ、床の端
か近に据う。大隋円形の白き琅玕の、沈みたる光沢を帯
テエブルべる卓子、上段の中央にあり。枝のままなる見事なる珊瑚
 の椅子、紅白二脚、紅きは花のごとく、白きは霞のごときを、

相對して置く。侍女等が捧出でて位置を変えて据えたるは、

その白き方一脚なり。

僧都 真鯛まだい大小八千枚。鰯ぶり、鮪まぐろ、ともに二万疋。鰹びき、真那鰹まながつお、

おのおの

各一万本。大比目魚おおひらめ五千枚。鱧きす、鮎ほうぼう、鮒こち、身魚あいなめ、目張魚めばる、

藻魚もうお、合せて七百籠かご。若布わかめのその幅六丈、長さ十五尋ひろのもの、

百枚ひとまき一卷九千連。鮫あんこう五十袋。虎河豚とらふぐ一頭。大の鮓たひとつが一

番い。さて、別にまた、月の灘なだの桃色の枝珊瑚一株、丈八尺。

(この分、手にて仕方す) 周圍まわりみかかえ三抱さんかかえの分にござりまして。え

え、月の真珠、花の真珠、雪の真珠、いずれも一寸の珠たま三十三

粒りゅう、八分の珠百五粒、紅宝玉三十顆か、大さ鶴の卵おおき、粒を揃えて、

これは碧瑪瑙あおめのうの盆かざに装かざり、綠宝玉、三百顆、孔雀くじやくの尾の渦

卷の数に合せ、紫の瑠璃るりの台、五色に透いて輝きまする鰐わにの皮
 三十六枚、沙金さきんの包七十袋。量目約百万両。閻浮檀金えんぶだこん十斤也。
 緞子どんす、縮緬ちりめん、綾あや、錦にしき、牡丹ぼたん、芍薬しゃくやく、菊の花、黄金色こんじきすみれの董、
 銀覆輪ぎんぷくりんの、月草、露草。

侍女一 もしもし、唯ただいま今のそれは、あの、残らず、そのお娘むすめ
 御ごの身の代しろとかにお遣わしの分なのでございますか。

僧都 残らず身の代と？……はあ、いかさまな。（心付く）不ふちよ
 重宝うぼう。これはこれは海松みるふさの袖に記して覚えのまま、潮うしおに
 乗つて、颯さつと読流しました。はて、何から申した事やら、品目
 の多い処へ、数々ゆえに。ええええ、真鯛大小八千枚。

侍女一 鰯、鮪ともに二万疋。鰹、真那鰹おのおの各一万本。

侍女二（僧都の前にあり）大比目魚五千枚。鱧、魴、鯛、あいなめ、目ばる、藻魚の類合せて七百籠。

侍女三（公子の背後にあり）若布のその幅六丈、長さ十五尋のもの百枚ひとまき一巻九千連。

侍女四（同じく公子の背後に）鮫鱧五十袋、虎河豚一頭、大の鮓ひとつがい一番。まあ……（笑う。侍女皆笑う。）

僧都（額の汗を拭く）それぞれさよう、さよう。

公子（微笑しつつ）笑うな、老人は真面目まじめでいる。

侍女五（最も少しわか。斉しく公子の背後に附添う。派手に美しきうるわ

声す）月の灘の桃色の枝珊瑚樹、対ついの一株、丈八尺、周圍まわりみかか三

抱えの分。一寸の玉三十三粒……雪の真珠、花の真珠。

侍女一 月の真珠。

僧都 しばらく。までじゃまでじゃ、までにござる。……桃色の枝珊瑚樹、丈八尺、周圍三抱の分までにござった。(公子に) 鶴の卵ほどの紅宝玉、孔雀の渦卷の綠宝玉、青瑪瑙の盆、紫の瑠璃の台。この分は、天なる(仰いで礼拝す)月宮殿みつきに貢のものにござりました。

公子 私もそうらしく思つて聞いた。僧都、それから後に言われた、その董、露草などは、金銀宝玉の類は云うまでもない、魚類ほどにも、人間が珍重しないものと聞く。が、同じく、あの方かたへ遣わしたものか。

僧都 綾、錦、牡丹、芍薬、纏もつれも散りもいたしませぬを、老人

の申条もうしじょう、はや、また海松みるのように乱れました。ええええ、

その董、露草は、若様、この度の御旅行につき、白雪はくせつの竜りゆう

馬めにめされ、渚なぎさを掛けて浦づたい、朝夕の、茜あかね、紫、雲の上

を山の峰へお潜しのびにてお出ましの節、珍しくお手に入りました

を、御姉君おんあねぎみ、乙姫様おとひめへ御進物の分でござりました。

侍女一 姫様は、閻浮檀金えんぶだんこんの一輪挿いちりんざしに、真珠の露でお活いけ遊ば

し、お手許てもとをお離しなさいませぬそうにございます。

公子 度々は手に入らない。私も大方、姉上に進あげたその事であ
ろうと思つた。

僧都 御意。娘の親へ遣わしましたは、真鯛より数えまして、珊瑚
一对……までに止とどまりました。

侍女二 海では何ほどの事でもございませませんが、受取ります陸おかの
 人には、鯛も比目魚も千と万、少ない数ではございますまいに、
 僅わずかな日の間に、ようお手廻し、お遣わしになりましたございま
 す。

僧都 さればその事。一國、一島、津や浦の果はてから果を一網ひとあみに
 もせい、人間なかま夥間おおうなばらが、大海原から取入れます獲えものというは、
 貝たまに溜たまるつた雫しずくほどにいささかなものでござつての、お腰元衆な
 ど思うてもみられまい、鉤はりの尖さきに虫を附けて雑魚ざこ一筋を釣ると
 いう仙人せんじん業わざをしますよ。この度の娘の父は、さまでにもな
 けれども、小船一つで網を打つが、海月くらげほどにしよぼりと拵ぢぢげ
 て、泡にも足らぬ小魚しやくを掬いれう。入いれものが小さき故に、それが希の

望ぞみを満みしますに、手間てまの入いること、何ともまだるい。鰯いわしを育て鯨くじらにするより齒痒はがゆい段だんの行止ゆきどまり。（公子こうしに向う）若様は御性急しやうきゅうじゃ。早く彼かが願ねがいを満みたいて、誓ちかいの美女びよを取れ、と御意ごいある。よつて、黒潮くろしほ、赤潮あかしほの御手兵ごてへいをちとばかり動うかしましたわ。赤潮あかしほの劍つるぎは、炎えんの稲妻いなづま、黒潮くろしほの黒い旗はたは、黒雲くろぐもの峰みねを築ついて、沖おきからと浴ゆびせたほどに、一浦ひとつうらの津波つなとなつて、田畑たはたも家いも山いへ流ながいた。片隅かたぐもの美女びよの家いへ、門背戸かどせどかけて、曇くも天井てんじやう、一い齊ちぎに、屋根やねの上うへの丘かみの腹はらまで運こ込みました儀ぎでござつたよ。

侍女三しよじゆさん まあ、お勇ゆうましいい。

公子こうし （少し俯うつむ向むく）勇ゆうましいいではない。家畑けはたを押流おしながして、浦うらのもの等は迷惑めいごくをしはしないか。

僧都 いや、いや、黒潮と赤潮が、密そと爪つまはじ弾はじきしましたばかり。

人命を断つほどではござりませなんだ。もつとも迷惑をせば、いたせ、娘の親が人間同士の間なかでさえ、自分ばかりは、思い懸けない海の幸を、黄金こがねの山ほど掴つかみましたに因よつて、他の人々の難な渋じゆごときはいささか氣にも留とどめませぬに、海のお世子よとりであらせられます若様。人間界の迷惑など、お心に掛かけさせますには毛頭もうとう当りませぬ儀でございます。

公子 うなず(領うく) そんなら可よし——僧都。

僧都 はは。あらた(更あらめて手てを支つく。)

公子 あれの親は、こちらから遣しんわした、娘の身の代しろとかいうものに満足をしたであろうか。

僧都 御意、満足いたしましたればこそ、当御殿、お求めに従い、美女を沈めました儀にござります。もつとも、真鯛、鯉、真那鯉、その金銀の魚類のみでは、満足をしませなんだが、続いて、三抱え一対の枝珊瑚を、夜の渚に差置きますると、山の端^は出づる月の光に、真紫に輝きまするを夢のように抱きました時、あれの父親は白砂に領伏^{ひれふ}し、波の裙^{すそ}を吸いました。あわれ竜神、一命も捧げ奉ると、御恩のほどを難^{ありがた}有^{あり}がりましたのでござります。

公子 (微笑す) 親仁^{おやじ}の命などは御免だな。そんな魂を引取ると、海月^{くらげ}が殖^ふえて、迷惑をするよ。

侍女五 あんな事をおっしゃいます。

一同笑う。

公子 けれども僧都、そんな事で満足した、人間の慾は浅いもの
だね。

僧都 まだまだ、あれは深い方でござります。一人娘の身に代えて、海の宝を望みましたは、慾念の逞たくましい故でござりまして。：
：たかだかは人間同士、夥なかま間うちで、白やわらかい柔あぶらみな膩あぶらみ身を、炎の
燃立つ絹に包んで蒸しながら売り渡すのが、峠の関所かと心得
ます。

公子 馬鹿だな。(珊瑚の椅子をすツと立つ) 恋しい女よ。望め
ば生命いのちでも遣やらうものを。……はは、はは。

微笑す。

侍女四 お思われ遊ばした娘御は、天地あめつちかけて、波かけて、お

仕合せでおいで遊ばします。

侍女一 早くお着き遊あそば可ようございます。私わたくしどももお待まち遠どおに存じ上げます。

公子 道中の様子を見よう、旅の様子を見よう。（闔ドアの外に向つ

て呼ぶ）おいおい、居間の鏡を寄越よこせ。（闔開く。侍女六、七、

二人、赤地の錦の蔽おおいを掛けたる大なる姿見を捧げ出づ。）

僧都も御覧。

僧都 失礼ながら。（膝行しつこうして進む。侍女等、姿見を卓子テエブルの上

に据え、錦の蔽ひらを展く。侍女等、卓子の端の一方に集る。）

公子 （姿見の面おもを指ゆびさし、僧都を見返る）あれだ、あれだ。あの

一点の光がそれだ。お前たちも見ないか。

舞台転ず。しばし暗黒、寂寞せきばくとして波濤はとうの音聞ゆ。やがて

ひとつ

一個、花白く葉の青き蓮華燈籠れんげどうろう、漂々として波に漾ただよえるが

あらわ

ごとく顕る。続いて花の赤き同じ燈籠、中空なかぞらのごとき高処

に出づ。また出づ、やや低し。なお見ゆ、少しく高し。その

数五個いっつ

になる時、累々たる波の舞台を露す。美女。毛卷島田けまきしまだ

に結う。

白の振袖、綾あやの帯、紅くれないの長襦袢ながじゆばん、胸に水晶の数珠じゆず

をかけ、襟に両袖を占めて、波の上に、雪のごとき竜馬りゆうめに

乗せらる。およそ手綱の丈を隔てて、一人下髪さげがみの女房。旅た

扮装びいでたち。

素足、小桂こうちぎに棲端折つまりて、片手に市女笠いちめがさを携え、

片手に蓮華燈籠を提ぐ。第一点の燈ともの影しびはこれなり。黒潮こくちよ

騎士^{うきし}、美女の白竜馬をひしひしと囲んで両側二列を造る。およ

そ十人。皆崑崙奴^{くろんぼ}の形相。手に手に、すすくと槍^{やり}を立つ。

穂先白く晃^{きらきら}々として、氷柱倒^{つらつかしま}に黒髪を縫う。あるものは燈

籠を槍に結ぶ^{ともしび}、灯の高きはこれなり。あるものは手にし、あ

るものは腰にす。

女房 貴女^{あなた}、お草臥^{くたびれ}でございましょう。一息、お休息^{やすみ}なさいま

すか。

美女 (夢見るようにその瞳^{みひら}を睜く) ああ、(歎息す) もし、誰^ど

方^{なた}ですか。……私の身体^{からだ}は足を空に、(馬の背に裳^{もすそ}を搔^{かいし}緊む)

倒^{さかさま}に落ちて落ちて、波に沈んでいるのでしょうか。

女房 いいえ、お美しいお髪ぐし一筋、風にも波にもお纏もつれはなさい

ません。何でお身体からだが倒などと、そんな事がございましょう。

美女 いつか、いつですか、昨夜ゆうべか、今夜か、前さきの世ですか。私

が一人、楫かじも櫓ろもない、舟に、筵むしろに乗せられて、波に流されま

した時、父親の約束で、海の中へ捕とらられて行く、私へ供養のた

めだと云つて、船の左右へ、前後あつちさきに、波のまにまに散つて浮

く……蓮華燈籠が流れました。

女房 水に目のお馴なれなさいませぬ、貴女には道しるべ、また土

産にもと存じまして、これが、（手に翳かざす）その燈籠でござい

ます。

美女 まあ、灯あかりも消えずに……

女房 燃えた火の消えますのは、油の尽きる、風の吹く、陸おかばかりの事でございます。一度、この国へ受取りますと、ここには風が吹きません。ただ花の香の、ほんのりと通うばかりでございます。紙の細工も珠たまに替つて、葉の青いのは、翡翠ひすいの琅玕ろうかん、花はな片びらの紅白は、真玉またま、白珠しらたま、紅宝玉。燃ゆる灯ひも、またたきながら消えない星でございます。御覧遊ばせ、貴女。お召めいもものが濡れましたか。お髪ぐしも乱れはしますまい。何で、お身体からだが倒さかさまでございませう。

美女 最後ひとめに一目ふるさと、故郷の浦の近い峰に、月を見たと思ひました。それぎり、底へ引くように船が沈んで、私は波に落ちたのです。ただ幻に、その燈籠あおの様な蒼い影を見て、胸を離れて遠

くへ行く、自分の身の魂か、導く鬼火かと思いましたが、ふと見ますと、前途にも、あれあれ、遥の下と思う処に、月が一輪、おなじ光で見えますもの。

女房 ああ、（望む）あの光は。いえ。月影ではございません。

美女 でも、貴方、雲が見えます、雪のような、空が見えます、瑠璃色の。そして、真白な絹糸のような光が射します。

女房 その雲は波、空は水。一輪の月と見えますのは、これから貴女がお出遊ばす、海の御殿でございます。あれへ、お迎え申すのです。

美女 そして。参って、私の身体は、どうなるのでございませうねえ。

女房 ほほほ、（笑う）何事も申しますまい。ただお嬉しい事なので。おめでとう存じます。

美女 あの、捨すておぶね小舟に流されて、海の贄にえに取られて行く、あの、
（みまわす）これが、嬉しい事なのでしようか。めでたい事なので
しようかねえ。

女房（再び笑う）お国ではいかがでございましょうか。私たちが故郷ふるさとでは、もうこの上ない嬉しい、めでたい事なのでござ
いますもの。

美女 あすこまで、道程みちのりは？

女房 お国でたとえは煩むずかしい。……おお、五十三次と承ります、
東海道を十度とたびずつ、三百度、往還ゆきかえりを繰返して、三千度いた

しますほどでございましょう。

美女 ええ、そんなに。

女房 めした竜馬は風よりも早し、お道筋は黄金こがねの欄干、白銀の

波のお廊下、ただ花の香りの中を、やがてお着きなさいます。

美女 潮風、磯いその香、海松みる、海藻かじめの、咽喉のどを刺す硫黄いおうの臭気においと思

いのほか、ほんに、清すずしい、佳いい薫かおり、（柔やわらかに袖を動かす）……

ですが、時々、悚然ぞつとする、腥なまぐさい香のしますのは？……

女房 人間の魂が、貴女を慕うのでございませう。海月くらげが寄るので

ございます。

美女 人の魂が、海月と云つて？

女房 海に参ります醜い人間の魂は、皆みんな、海月になつて、ふわふ

わさまようて歩ある行きますのでございませす。

黒潮騎士（口々に）——煩うるせい。しっしっ。——（と、ものなき

竜馬の周囲を呵かす。）

美女 まあ、情なさけない、お恥はずかしい。（袖をもつて面おもてを蔽おおう。）

女房 いえ、貴女は、あの御殿の若様の、新夫人にいおくさまでいらつしや
います、もはや人間ではありません。

美女 ええ。（袖を落す。——舞台転ず。真暗まっくらになる。）——

女房（声のみして）急ぎましよう。美しい方を見ると、黒鰐くろわに、

赤鯨あかさめが襲あいます。騎馬が前後を守護きりあしました。お憂慮きづかいはあ

りませんが、いぎ参ると、斬合きりあい攻合せめあう、修羅ちまたの巷をお目に懸

けねばなりません。——騎馬の方々、急いで下さい。

燈籠一つ行き、続いて一つ行く。漂蕩する趣して、高く

低く奥の方深く行く。

舞台燦然として明るし、前の琅玕殿顕る。

公子、椅子の位置を卓子に正しく直して掛けて、姿見の傍

にあり。向つて右の上座。左の方に赤き枝珊瑚の椅子、人

なくしてただ据えらる。その椅子を斜に下りて、沖の僧都、

この度は腰掛けてあり。黒き珊瑚、小形なる椅子を用いる。

おなじ小形の椅子に、向つて正面に一人、ほぼ唐代の儒の服

装したる、髯黒き一人あり。博士なり。

侍女七人、花のごとくその間を装い立つ。

公子 博士、お呼立をしました。

博士 (敬礼す。)

公子 これを御覧なさい。(姿見の面おもてを示す。)

千仞せんじんの岨がけを累かさねた、漆のような波の間を、幽かすかに蒼あおい灯ともに照ら

されて、白馬の背に手綱たづなしたは、この度迎え取るおもいものな

んです。陸に獅子しし、虎の狙おなじうと同一にゆうどうに、入道鰐わに、坊主鮫ぼうずざめ

の一群が、美女と見れば、途中に襲撃おそつて、黒髪を吸い、白

き乳を裂き、美しい血を呑のもうとするから、守備のために旅行

さきで、手にあり合せただけ、少数の黒潮騎士を附添つわせた。

渠等かれらは白刃しらばを揃そろえている。

博士 至極しごくのお計はからいに心得こころまするが。

公子 ところが、敵に備うるここの守備を出払はらわしたから不用心

じゃ、危険であろう、と僧都が言われる。……それは恐れん、私が居れば仔細しさいない。けれども、また、僧都の言われるには、白衣びやくえに緋ひの襲かさねした女子おなごを馬に乗せて、黒髪を槍やり尖さきで縫ぬいつたのは、かの国で引廻とましとか称となえた罪人の姿に似ている、私の手て許もとに迎入るるものを、不祥ふしようじゃ、忌わしいと言うのです。事実不祥なれば、途中の保護は他にいくらも手段があります。それは構わないが、私はいささかも不祥と思わん、忌わしいと思わない。

これを見ないか。私の領分に入った女の顔は、白い玉が月の光に包まれたと同一おなじに、いよいよ清い。眉は美しく、瞳は澄み、唇の紅は冴さえて、いささかも窶やつれない。憂えておらん。清らか

な衣きものを着、新あらたに梳しげつて、花はなに露つゆの点した滴たる装よそして、馬うまに騎またした姿すがたは、かの国の花野はなの丈たけを、錦にしきの山やまの懐なごに抽ぬく……歩ある行くより、車くるまより、駕籠かごに乗のつたより、一層いっそう鮮あざ麗やかなものだと思おもう。その上うへ、選えら抜ひした慄ひよう悍かんな黒潮騎士くろしほきしの精銳せいと等に、長槍ながやりをもつて四辺あたりを払はわけて通とほるのです。得意とくい思おもうべしではないのですか。

僧都そうと（頻しきりに頭つむりを傾かく。）

公子こうし 引廻ひきまわしと聞きけば、恥はにかみを見みせるのでしよう、苦痛くるしみを与あたえるのであろう。槍やりで囲かこみ、旗はたを立て、淡あざく清きく装まつた得意とくいの人ひとを馬うまに乗のせて市いちを練ねつて、やがて刑場けいじやうに送おくつて殺ころした処ところで、——殺ころされるものは平凡へいべんに疾やま病いで死しするより愉快えんげきでしょう。——それが何なにの刑罰けいばつになるのですか。陸りくと海かいと、国くにが違ちがい、人情にんじやうが違ちがつ

ても、まさか、そんな刑罰はあるまいと想う。僧都は、うろ覚えながら確たしかに記憶に残ると言われる。……貴下あなたをお呼立した次第です。ちよつとお験しらべを願ひましようか。

博士 おおせき
仰聞おほきけの記憶は私わたくしにもあります。しかし、念のために験まじべます。ええ、陸上りくじやう一切の刑法の記録でありましようか、それとも。

公子 面倒めんどうです、あとはどうでも可いい。ただ女子おなごを馬うまに乗せ、槍やりを立てて引廻ひきまわしたという、そんな事があつたかという、それだけです。

博士 正史せいしでなく、小説しょうせつ、浄瑠璃じやうろうりの中を見ましよう。時の人情にんじやうと風俗ふうぞくとは、史書ししょよりもむしろこの方が適当てきとうであります。

(金光燦爛たる洋綴の書を展く。)

公子 (卓子テエブルに腰を掛く) たいそう気の利いた書物ですね。

博士 これは、仏国の大帝 奈翁ナポレオンが、西暦千八百八年、西班牙

遠征の途に上りました時、かねて世界有数の読書家。必要によ

つて当時の図書館長バルビールに命じて製つくらせました、函入

新装の、一千巻、一ひとたな架の内容は、宗教四十巻、叙事詩四十巻、

戯曲四十巻、その他の詩篇六十巻。歴史六十巻、小説百巻、と

申しまするデュオデシモ形がたと申す有名な版本の事を……お聞及

びなさいまして、御姉君おあねぎみ、乙姫様が御工夫を遊ばしました。蓮はす

の糸、一筋を、およそ枚数千頁に薄く織拵ひとおげて、一万枚が一

折り、一百二十折を合せて一冊に綴とじましたものであります、

この国の微妙なる光に^{ひら}展きますると、^{しんらばんしやう}森羅万象、人類をはじめ、動植物、鉱物、一切の元素が、^{ひとつ}一々ずつ微細なる活字となつて、しかも、^{おのおの}各々五色の輝^{かがやき}を放ち、名詞、代名詞、動詞、助動詞、主客、句読^{くとう}、いずれも個々別々、七彩に照つて、かく開きました^{まつしろ}真白な枚^{ペエジ}の上へ、自然と、染め出さるるのであります。

公子 ^{あねうえ}姉上が、それを。——さぞ、御秘蔵のものでしよう。

博士 御秘蔵ながら、若様の御書物蔵へも、^{ちやん}整然と姫様がお備えついでありますので。

公子 では、私の所有ですか。

博士 若様はこの冊子と同じものを、^{めのう}瑪瑙に青貝の^{まきえ}蒔絵の書棚、

五百架たな、御所有でいらせられます次第であります。

公子 姉があつて幸福しあわせです。どれ、（取つて披ひらく）これは……
ただ白紙だね。

博士 は、恐れながら、それぞれの予備の知識がありませんでは、
自然のその色彩ある活字は、ペエジの上には写り兼ねるのでござ
います。

公子 恥入るね。

博士 いやいや、若様は御勇武でいらせられます。入道にゆうどう鰐わに、

黒鮫くろざめの襲ういまする節は、御訓練の黒潮、赤潮騎士、御手の劍つるぎ

でのうては御退けになりまする次第には参らぬのであります。

けれども、姉姫様の御心づくし、節々は御閲読ごえつどくの儀をお勧め

申まするので。

僧都 もろともに、お勧め申上げますでござります。

公子 (うなず) (頷く) まあ、今の引廻しの事を見て下さい。

博士 (たしか) 確に。(書を披く) 手近に浄瑠璃にありました。ああ、こ

れにあります。……若様、これは大日本浪華の町人、大経師

以春 (いしゆん) の年若き女房、名だたる美女のおさん。手代茂右衛門と

不義顯れ、すなわち引廻し礫 (はりつけ) になりまする処を、記したのであ

りまして。

公子 お読み。

博士 (朗読す) —— 紅蓮 (ぐれん) の井戸堀、焦熱 (しょうねつ) の、地獄のかま塗 (ぬり)

よしなやと、急がぬ道をいつのまに、越ゆる我身の死出の山、

死出の田長たおさの田がりよし、野辺のべより先を見渡せば、過ぎし冬とうじ至
 の冬枯この、木この間木まの間にちらちらと、ぬき身の檜やりの恐しや、

公子（姿見を覗のぞきつつ、且つ聴きつつ）ああ、いくらか似てい
 る。

博士——また冷ひえかえ返る夕嵐、雪の松原、この世から、かかる苦く
 患げんにおう亡もう日にち、島田乱れてはらはらはら、顔にはいつもはん
 げしよう、縛られし手の冷たさは、我身一つの寒いりの入、涙ぞ指
 の爪とりよし、袖に氷を結びけり。……

侍女等、傾聴す。

公子　ただ、いい姿です、美しい形です。世間はそれでその女の

罪を責めたと思うのだろうか。

博士　まず、ト見えまするので。

僧都　さようでございます。

公子　馬に騎のった女は、殺されても恋が叶かない、思いが届いて、さぞ本望であらうがね。

僧都　——袖に氷を結びけり。涙などと、歎き悲しんだようにござります。

公子　それは、その引廻しを見る、見物の心ではないのか。私には分らん。かぶり（頭を掉ふる。）博士——まだ他に例があるのですか。

博士　（朗読す）……世の哀あわれとぞなりにける。今日は神田のくずれ橋に恥をさらし、または四谷、芝、浅草、日本橋に人こぞり

て、見るに惜おしまぬはなし。これを思うに、かりにも人は悪あしき事をせまじきものなり。天これを許したまわぬなり。……

公子（眉ひそを顰ひそむ。——侍女等ひと齊ひとしく不審の面おも色もちす。）

博士 ……この女思込みし事なれば、身の窶やつるる事なくて、毎日ありし昔のごとく、黒髪を結うわせて美うわしき風情。……

公子（色解く。侍女等、眉をひらく。）

博士 中略をいたします。……聞く人一しおいたわしく、その姿を見おくりけるに、限かぎりある命のうち、入相いりあいの鐘つくころ、品しなかわりたる道芝ほとりの辺ほとりにして、その身は憂うれき煙となりぬ。人皆いずれの道にも煙はのがれず、殊に不便はこれにぞありける。——これで、鈴ヶ森ひあぶりで火刑ひあぶりに処せられまするまでを、確か江戸

中棄すてふだ札やりに槍を立てて引廻した筈はずと心得まするので。

公子 分りました。それはお七という娘でしょう。私は大すきな女なんです。御覧なさい。どこに当人が歎かなき悲なしみなぞしたのですか。人に惜おしまれ可あわれ哀われがられて、女それ自身は大満足で、自じじや若くとして火に焼かれた。得意想うべしではないのですか。なぜそれが刑罰なんだね。もし刑罰とすれば、恵めぐみの杖しも、情なさけの鞭むちだ。實際その罪を罰しようとするには、そのまま無事に置いて、平へい凡ぐずぐずに愚ぐず図ぐずに生いき存ながらえさせて、皺しわだらけの婆ばばにして、その娘を終らせるが可いいと、私は思う。……分けて、現在、殊ととにそのお七のごときは、姉上が海へお引取りになった。刑場の鈴ヶ森は自然海に近かった。姉上は御覧になった。鉄の鎖は手足を

繫つないだ、燃もえぐさ草は夕霜を置残してその肩を包んだ。煙は雪の振袖をふすべた。炎は緋ひがのこ鹿子を燃え抜いた。緋の牡丹ぼたんが崩れるより、虹にじが燃えるより美しかった。恋の火の白熱は、凝こつて白はくぎ玉よくとなる、その膚はだえを、氷ひなげしつた雛芥子ひなげしの花に包んだ。姉の手の甘露が沖を曇らして注いだのだった。そのまま海の底へお引取りになつて、現に、姉上の宮殿に、今も十七で、紅くれなゐの珊瑚の中に、結ゆいわた綿わたの花を咲かせているのではないか。男は死ななかつた。存命ながらえて坊主になつて老い朽ちた。娘のため、姉上はそれさえお引取りになつた。けれども、その魂は、途中で牡おすの海月くらげになつた。——時々未練に娘を覗のぞいて、赤潮に追払おすわれて、醜みにくく、ふらふらと生なまじろ白ただよく漾ううて失する。あわれ

なものだ。

娘は幸福しあわせではないのですか。火も水も、火は虹となり、水は滝となつて、彼の生命を飾つたのです。拔身ぬきみの槍の刑罰が馬の左右に、その誉ほまれを輝かすと同一おんなじに。——博士いかがですか、僧都。

博士　しかし、しかし若様、私わたくしは慎重にお答えをいたしまする。身はこの職にありながら、事実、人間界の心も情も、まだいささかも分らぬのであります。若様、唯ただいま今の仰おおせは、それは、すべて海の中にのみ留とどまりまするが。

公子　（穏和うなずに頷く）姉上も、以前お分りにならぬと言われた。その上、貴下あなたがお分りにならなければこれは誰にも分らないの

です。私にも分らない。しかし事情も違う。彼を迎える、道中のこの（また姿見を指す）ゆびさ馬上の姿は、別に不祥ではあるまいと思う。

僧都 唯今、仰せ聞けられ承りまする内に、すじみち条理は弁わきまえず、僧都にも分らぬことのみではござりますが、ただ、黒潮の拔身ぬきみで囲みました段は、別に忌わしい事ではござりませんように、老人にも、その合点参りましてござります。

公子 可、よししかし僧都、ここに蓮華燈籠の意味も分った。が、一つ見馴みなれないものが見えるぞ。女が、黒髪と、あの雪の襟との間に——胸に珠を掛けた、あれは何かね。

僧都 はあ。テエブル（卓子に伸上る）はは、いかさま、いや、若様。

あれは水晶の数珠じゆずにございます。海に沈みまする覚悟につき、冥土めいどに参る心得のため、檀那寺だんなでらの和尚おしょうが授けましたのでござります。

公子 冥土とは？……それこそ不埒ふらちだ。そして仇光あだびかりがする、あれは……水晶か。

博士 水晶とは申す条、近頃は専ら硝子ペイドロを用いますので。

公子 (一笑す) 私の恋人ともあろうものが、無ければ可いい。が、硝子ペイドロとは何事ですか。金剛石、また真珠の揃うたのが可いい。

……博士、贈つてしかるべき頸飾えりかざりをお検しらべ下さい。

博士 畏かしこまりました。

公子 そして指環ゆびわの珠の色も怪しい、お前たちどう見たか。

侍女一 近頃は、かんでらの灯の露ほしみせ店に、紅ルビイ宝玉、緑エメラルド宝玉と申して、貝ひさを鬻ぐと承ります。

公子 お前たちの化粧の泡が、波に流れて渚なぎさに散った、あの貝が宝石か。

侍女二 錦きんらん欄の服を着けて、青い頭巾ずきんを被かぶりました、立派たな玉ま商人まあきんどの売りますものも、擬にせが多いそうにございます。

公子 博士、ついでに指環を贈ろう。僧都、すぐに出向うて、遠路であるが、途中、早速、硝子ビイドロとその擬まが珠たまを取棄てさして下さい。お老としより寄に、御苦勞ながら。

僧都 (苦笑す) 若様には、新夫人にいおくさまの、まだ、海にお馴なれなさらず、御到着の遅いばかり気になされて、老人が、ここに形を

消せば、瞬く間ものう、お姿見の中の御馬の前に映りまする神んずう通を、お忘れなされて、老寄に苦勞などと、心外な御意を蒙りまするわ。

公子 ははは、（無邪気に笑う）失礼をしました。

博士、僧都、一いちゆう揖して廻廊より退場す。侍女等いんぎん慇懃に見送る。

少し窮屈であつたげな。

侍女等親しげに皆その前後にか齊眉しき寄る。

性急な私だ。——女を待つ間まの心こころ遣やりにしたい。誰か、あの国の歌を知っておらんか。

侍女三 存じております。浪花津ななわづに咲くやこの花 冬ふゆ籠こもり、今を

春へと咲くやこの花。

侍女四 若様、私も存じております。浅香山を。

公子 いや、そんなのではない。（博士がおきたる書を披きつつ）

女の国の東海道、道中の唄だ。何とか云うのだった。この書は
いくらか覚えがないと、文字が見えないのだそうだ。（呟く）

姉上は貴重な、しかし、少しあてつこすりの書をお拵えになつ

たよ。ああ、何とか云った、東海道の。

侍女五 五十三次のございましょう、私が少し存じております。

公子 歌うてみないか。

侍女五 はい。（朗かに優しくあわれに唄う。）

都路は五十路あまりの三つの宿、……

公子 おお、それだ、字書のように、江戸紫で、都路と標目みだしが出た。
 た。(展ひらく)あとを。

侍女五 ……時得て咲くや江戸の花、浪静しずかなる品川や、やがて越こ来る川崎の、軒端のきばならぶる神奈川は、早や程ヶ谷に程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ。紫匂におう藤沢の、野面のおもに続く平塚も、もとのあわれは大磯おおいそか。蛙鳴かわずくなる小田原は。 …… (極きまり悪わるげに) ……もうあとは忘れましました。

公子 可よし、ここに緑の活字が、白い雲の枚ペエジに出た。——箱根を越えて伊豆の海、三島の里の神垣や——さあ、忘れた所は教えてやろう。この歌で、五十三次の宿を覚えて、お前たち、あの道ど中うちゆうすごろく双六うちゆうすごろくというものを遊んでみないか。上あがりは京都だ。姉の

御殿に近い。誰か一人上つて、双六の済む時分、ちようど、この女は（姿見を見つつ）着くであろう。一番上りのものには、瑪瑙めのうの莢さやに、紅宝玉の実を装かざった、あの造りものの吉祥果きつしようかを遣やる。絵は直ぐに間に合ぬ。この室へやを五十三に割つて双六の目に合せて、一人ずつ身体からだを進めるが可よかろう。……賽さいが要る、持つて来い。

（侍女六七、うつむいてともに微笑す）——どうした。

侍女六 姿見をお取寄せ遊ばしました時。

侍女七 二人して盤の双六をしておりますので、賽は持つてお
りますのでございます。

公子 おもしろい。向うの廻廊の端へ集まれ。そして順になつて

始めるが可い。

侍女七 床へ振りましようでございますか。

公子 心あつて招かないのに来た、賽にも魂がある、寄越せ。

(受取る) 卓テエブル子の上へ私が投げよう。お前たち一から七まで、目に従うて順に動くが可い。さあ、集れ。

(侍女七人、いそいそと、続いて廻廊のはずれに集り、貴女は
一。私は二。こう口々に楽しげに取定め、勇みて賽を待つ。)
可いか、(片手に書を持ち、片手に賽を投ぐ)——一は三、かな川へ。(侍女一人進む)二は一、品川まで。(侍女一人また進む)三は五だ、戸塚へ行け。

(かくして順々に繰返し次第に進む。第五の侍女、年最も少き

が一人衆を離れて賽の目に乗り、正面突当りなる窓際に進み、他と、あわい間隔る。公子。これより前、さき姿見を見詰めて、賽の目と宿の数を算え淀む。かぞ……この時、よどうかとしたる体ていに書を落す。)
 まだ、誰も上らないか。

侍女一 やつと一人天竜川まで参りました。

公子 ああ、まだるっこい。賽を二つ一所に振ろうか。(手にしながら姿見に見入る。侍女等、ひとしそなた等く其方を凝視す。)

侍女五 きやつ。(叫ぶ。ひま隙なし。その姿、窓の外へ裳もすそを引いて颯さつと消ゆ) ああれえ。

侍女等、口々に、あれ、あれ、鮫さめが、鮫が、入道鮫が、と立乱れ騒ぎ狂う。

公子 入道鮫が、何、（窓に衝と寄る。）

侍女一 ああ、黒鮫が三百ばかり。

侍女二 取巻いて、群りかかつて。

侍女三 あれ、入道が口に銜えた。

公子 外道げどう、外道、その女を返せ、外道。（叱咤しつたしつつ、窓より

出でんとす。）

侍女等すが継り留むとど。

侍女四 軽々しい、若様。

公子 放せ。あれ見い。外道の口の間から、女の髪が溢こぼれて落ち

る。やあ、胸へ、乳へ、牙きばが喰入る。ええ、油断した。……骨

も筋も断きれような。ああ、手を悶もだえる、裳もすそを煽あおる。

侍女六　いいえ、若様、私たち御殿の女は、身からだは綿よりも柔かです。

侍女七　蓮はすの糸を束つかねましたようですから、鰐わにの牙が、脊筋と鳩み尾ずおちへ噛かみ合あいまして、薄紙ひとえ一重透ときます内は、血にも肉にも障りません。

侍女三　入道も、一類も、色を漁あるのでございます。生命いのちはしばらく助りましょう。

侍女四　その中うちに、その中に。まあ、お静まり遊ばして。

公子　いや、俺の力は弱いもののためだ。生命いのちに掛けて取返す。

——鎧よろいを寄越せ。

侍女二人衝つと出で、引返して、二人して、一領の鎧を捧げ、

背後うしろより颯さつと肩かたに投掛なく。

公子、上へ引いて、頸うなじよりつらなりたる兜かぶとを頂かぶく。角つのある毒

竜すさま、凄あさまじき頭かしらとなる。その頭を頂かぶく時に、侍女等、鎧よろいの裾すそを

捌さばく。外套がいとうのごとく背より垂れて、紫うろこの鱗こ、金色こんじきの斑点

連り輝く。

公子、また袖を取つて肩よりして自のどら喉のどに結ぶ、この結びめ、

左右一つ双ふたの毒竜どくりゆうの爪つめなり。迅速すみどに一縮す。立直るや否いなや、劍つるぎ

を抜いて、頭上かぶに鬚かざし、ハタと窓外まどがはを睨にらむ。

侍女六人、斉ひとしくその左右ひだりみぎに折敷せしきき、手に手にあいくちヒ首あいくちを抜連

れて晃きら々と敵かたに構かまう。

外道げだう、退ひくな。(凝じつと視みて、劍の刃やいばを下したに引く) 虜とりこを離はなした。

受取れ。

侍女一 鎧をめしたばつかりで、御威徳を恐れて引きました。

侍女二 長う太く、すひやく数百の鮫のかさなつて、むかで蜈蚣のように見え
たのが、ああ、ちりぢりに、ちりぢりに。

侍女三 めだかのように遁にげて行ゆきます。

公子 おお、ちようど黒潮等が帰つて来た、帰つた。

侍女四 ほんに、おつかい帰りの姉さんが、とりこを抱取つて下
すつた。

公子 介抱してやれ。お前たちは出迎え。

侍女三人ずつ、一方はとびら鬨のうちへ。一方は廻廊に退場。

公子、まんなか真中に、すつくと立ち、静かにつるぎ剣を納めて、めて右手な

る白珊瑚しろさんごの椅子いすに凭よる。騎士五人廻廊まで登場。

騎士一同 (槍やりを伏せて、裾うすくまり、同音に呼ぶ) 若様。

公子 おお、帰ったか。

騎士一 もつての外な、今ほどは。

公子 何でもない、私は無事だ、皆御苦勞だったな。

騎士一同 はッ。

公子 途中まで出向つたらう、僧都はどうしたか。

騎士一 あとの我ら夥間なかもを率いて、入道鮫を追掛けて参りました。

公子 よい相手だ、戦鬪は観みものであろう。——皆は休むが可いい。

騎士 槍やりは鞆たもとに納めますまい、このまま御門を堅めまするわ。

公子 さままでにせずとも大事な、休め。

騎士等、礼拝して退場。侍女一、登場。

侍女一 御安心遊ばしまし、疵きずを受けましたほどでもございませ
ん。ただ、酷ひどく驚きまして。

公子 可愛相かわいそうに、よく介抱してやれ。

侍女一 二人が附添っております、（廻廊を見込む）ああ、もう
御廊下まで。（公子のさしずにより、姿見に錦の蔽おおいを掛とびらけ、闌
に入る。）

美女。先達せんだつの女房に、片手、手を曳ひかれて登場。姿を肅しずかに、
深く差俯さしうつむ向き、面影やややつれたれども、さまで悪怯わるびれざ
る態度、徐おもむろに廻廊を進みて、床を上段に昇る。昇る時も、裾す
そさばしずか
捌さばき静しずなり。

侍女三人、燈籠二個ふたつずつ二人、一つを一人、五個いつつを提げて附添い出で、一人々々、廻廊の廂ひさしに架かけ、そのまま引返す。燈籠を侍女等の差置き果つるまでに、女房は、美女をその上段、あか紅き枝珊瑚の椅子まで導く順にてありたし。女房、謹んで公子に礼して、美女に椅子を教う。

女房 お掛け遊ばしませう。

美女、据置かるる状さまに椅子に掛く。女房はその裳もすそに跪居ついでる。

美女、うつむきたるまましばし、皆無言。やがて顔を上げて、正しく公子と見向ふ。瞳を据えて瞬まばたきせず。——間ま。

公子 よく見えた。(無造作に、座を立て、テエブル卓子の周囲まわりに近づき、手を取らんと衝つと腕かいなを伸ばす。美女、崩るるがごとくに

椅子をはずれ、床に伏す。）

女房 どうなさいました、貴女あなた、どうなさいました。

美女 （声細く、されども判然）はい、……覚悟しては来ましたけれど、余りと言え、可恐おそろしゆううございますもの。

女房 （心付く）おお、若様。その鎧よろいをお解き遊ばせ。お驚きなさいますのもごもつともでございます。

公子 解いても可いい、（結び目に手を掛け、思慮す）が、解かんでも可よかろう。……最初に見た目はどこまでも附つきま絡う。（美

女に）貴女あなた、おい、貴女、これを恐れては不可いか、私はこれあるがために、強い。これあるがために力があり威かがある。今も既にこれに因つて、めしつかう女の、入道鮫に噛かまれたのを助

けたのです。

美女（やや面おもてを上ぐ）お召使が鮫の口に、やつぱり、そんな可

そろし恐い処ところなんでございますか。

公子 はははは、（笑う）貴女、敵のない国が、世界のどこにあるんですか。仇あだは至る処ところに満ちている——ただ一人いちにんの娘を捧ぐ、……海の幸を賜われ——貴女の親は、既に貴女の仇なのではないか。ただその敵に勝てば可いいのだ。私は、この強さ、力、威あるがために勝つ。閨ねやにただ二人ある時でも私はこれを脱ぐまいと思う。私の心は貴女を愛して、私の鎧は、敵から、仇から、世界から貴女を守護する。弱いもののために強いんです。毒竜の鱗うろこは絡まとい、爪いは抱いだき、角つは枕のしてもいささかも貴女の身

は傷けない。ともにこの鎧に包まるる内は、貴女は海の女王なんだ。放縦に大胆に、不羈、専横に、心のままにして差支えない。鱗に、爪に、角に、一糸掛けない白身を抱かれ包まれて、渡津海の広さを散歩しても、あえて世に憚る事はない。誰の目にも触れない。人は指をせん。時として見るものは、沖のその影を、真珠の光と見る。指すものは、喜見城の幻景に迷うのです。

女の身として、優しいもの、媚あるもの、従うものに慕われて、それが何の本懐です。私は鱗をもつて、角をもつて、爪をもつて愛するんだ。……鎧は脱ぐまい、と思う。（従容として椅子に戻る。）

美女（起直り、会釈す）……父へ、海の幸をお授け下さいました、津波のお強さ、船を覆して、ここへ、遠い海の中をお連れなすつた、お力。道すがらはまたお使者で、金剛石のこの襟えりか飾ざり、宝玉のこの指環、（嬉しげに見ゆ）貴方あなたの御威徳はよく分りましたのでございます。

公子 津波位しき、家来どもが些細ささいな事を。さあ、そこへお掛け。

女房、介抱して、美女、椅子に直る。

頸飾くびかざりなんぞ、珠なんぞ。貴女の腰掛けている、それは珊瑚だ。美女 まあ、父に下さいました枝よりは、幾倍とも。

公子 あれは草です。較くらぶればここのは大樹だ。椅子の丈は陸くがの山よりも高い。そうしている貴女の姿は、夕日影の峰に、雪の

消残ったようであろう。少しく離れた私の兜かぶとの竜頭たつがしらは、城の天守の棟に飾った黄金の鯨しやちほどに見えようと思う。

美女 ああ、人の目に、それが、貴方？

公子 譬諭たとえです、人間の目には何にも見えん。

美女 ああ、見えはいたしますまい。お恥かしい、人間の小さな心には、ここに、見ますれば私が裳すそを曳ひきます床も、琅玕ろうかんの一枚石。こうした御殿のある事は、夢にも知らないのです。ごさいますもの、情なさけのう存じます。

公子 いや、そんなに謙遜をするには当らん。陸くがには名山、佳水かすいがある。峻岳しゅんがく、大河がある。

美女 でも、こんな御殿はないのです。

公子 あるのを知らないのです。海底の琅玕の宮殿に、宝蔵の珠
 玉金銀が、虹にじに透いて見えるのに、更科さらしなの秋の月、錦にしきを染め
 た木曾の山々は劣りはしない。……峰には、その錦葉もみじを織たる竜
 田姫つたひめがおいでなんだ。人間は知らんのか、知っても知らない
 ふりをするのだろう。知らない振ふりをして見ないんだらう。――
 陸くがは尊い、景色は得難い。今も、道中どうちゆうすごろく双六しうらくをして遊ぶのに、
 五十三次ごじゅうさんじの一枚絵いちまいゑさえ手許てもとにはなかつたのだ。絵ゑも貴とうとい。

美女 あんな事をおっしゃって、絵には活いきたものは住んでおり
 ませんではありませんか。

公子 いや、住居すまいをしている。色彩は皆活きて動く。けれども、
 人は知らないのだ。人は見ないのだ。見ても見ない振ふりをしてい

るんだから、決して人間の凡てを貴いとは言わない、美しいとは言わない。ただ陸は貴い。けれども、我が海は、この水は、一畝りの波を起して、その陸を浸す事が出来るんだ。ただ貴く、美しいものは亡びない。……中にも貴女は美しい。だから、陸の浦を亡ぼして、ここへ迎え取ったのです。亡ぼす力のあるものが、亡びないものを迎え入れて、且つ愛し且つ守護するのです。貴女は、喜ばねば不可い、嬉しがらなければならぬ、悲しんではなりません。

女房 貴女、おっしゃる通りでございます。途中でも私が、お喜ばしい、おめでたい儀と申しました。決してお歎きなさいませぬ。事はありません。

美女 いいえ、歎きはいたしません。悲しみはいたしません。ただ歎きますもの、悲しみますものに、私の、この容子ようすを見せてやりたいと思うのです。

女房 人間の目には見えません。

美女 故郷ふるさとの人たちには。

公子 見えるものか。

美女 (やや意気ぐむ) あの、私の親には。

公子 貴女は見えると思うのか。

美女 こうして、活いきておりますもの。

公子 (屹きつとしたる音調) 無論、活いきている。しかし、船から沈む時、ここへ来るにどういう決心をしたのですか。

美女 それは死ぬ事と思ひました。故郷ふるさとの人も皆そう思つて、

分けて親は歎き悲しみました。

公子 貴女の親は悲しむ事は少しもなからう。はじめからそのつもりで、約束の財を得た。しかも満足だと云つた。その代りに娘を波に沈めるのに、少しも歎くことはないではないか。

美女 けれども、父娘おやこの情愛でございます。

公子 勝手な情愛だね。人間の、そんな情愛は私には分らん。

(頭かぶりを掉ふる)が、まあ、情愛としておく、それで。

美女 父は涙にくれました。小船が波に放たれます時、渚なぎさの砂に、

父の倒たおれ伏ふしました処は、あの、ちようど夕月に紫の枝珊瑚を

抱きました処なのです。そして、後あとの歎なげは、前の喜びにくらべ

まして、幾十層倍だったでございましょう。

公子 じゃ、その枝珊瑚を波に返して、約束を戻せば可よかった。

美女 いいえ、ですが、もう、海の幸も、枝珊瑚も、金銀に代り、

家蔵いえくらに代つていたのでございます。

公子 可よし、その金銀を散らし、施し、棄て、蔵を毀こぼち、家を焼い

て、もとの破蓑やれみの一領、網一具の漁民となつて、娘の命いのち乞こい

をすれば可よかった。

美女 それでも、約束の女を寄越せと、海坊主のような黒い人が、

夜ごと夜ごと天井を覗のぞき、屏風びょうぶを見越し、壁襖ふすまに立つて、責

めわたり、催促をなさいます。今更、家蔵に替えましたツて、

とそう思ったのでございます。

公子 貴女の父は、もとの貧民になり下るから娘を許して下さい、と、その海坊主に掛合かけあつてみたのですか。みはしなكارう。そして、貴女を船に送出す時、磯いそに倒れて悲しもうが、新しい白壁、艶つやある蕨いらつかを、山際の月に照らさして、夥多あまたの奴婢ぬひに取巻かせて、近頃呼入れた、若い妾めかけに介抱かいぼうされていたではないのか。なぜ、それが情愛なんです。

美女 はい。……（恥じて首低うなだる。）

公子 貴女を責せむるのではない。よしそれが人間の情愛なれば情愛で可よい、私とは何の係わりもないから。ちつとも構わん。が、私の愛する、この宮殿にある貴女が、そんな故郷ふるさとを思おもうて、歎なげいては不可いか。悲しんでは不可いかと云うのです。

美女 貴方。(向直る。声に力を帯ぶ) 私は始めから、決して歎
 いてはいないので。父は悲しみました。浦人うらびとは可哀あわれがりま
 した。ですが私は——約束に応じて宝を与え、その約束を責め
 て女を取る、——それが夢なれば、船に乗つても沈みはしまい。
 もし事実として、浪に引入るるものがあれば、それは生しょうあるも
 の、形あるもの、云うまでもありません、心あり魂あり、声あ
 るものに違いない。その上、威があり力があり、榮さかえと光とある
 ものに違いないと思ひました。ですから、人はそうして歎いて
 も、私は小船で流されますのを、さまで、慌あわてさわ騒さわぎも、泣悲
 しみも、落着過ぎもしなかつたんです。もしか、船が沈まなけ
 れば無事なんです。生命いのちはあるんですもの。覆す手があれば、

それは生きている手なんです。その手に縋すがつて、海の中に生きられると思つたのです。

公子（聞きつつ莞爾かんじとす）やあ、（女房に）……この女は豪えらいぞ！ はじめから歎いておらん、慰め賺すかす要はない。私はしおらしい。あわれな花を手活ていけにしてながめようと思つた。違ちがう！ これは楽たのしく歌う鳥だ、面白い。それも愉快だ。おい、酒を寄越せ。

手を挙ぐ。たちまち鬮ドア開けて、三人の侍女、二ふた罍びんの酒と、白金の皿に一對の玉たまのさかずき盞せんを捧げて出づ。女房盞を取つて、公子と美女の前に置く。侍女退場す。女房酒を両方に注つぐ。

女房 めし上りまし。

美女 (辞宜す) 私は、ちつとも。

公子 (品よく盞を含みながら) 貴女、少しも辛うない。

女房 貴女の薄紅うすべになは桃の露、あちらは菊花しずくの雫です。お国で

は御存じありませんか。海には最上の飲料のみしろです。お気が清すずしく
 くなります、召あがれ。

美女 あの、桃の露、(見物席の方へ、半ば片袖を蔽おおうて、うつ

むき飲む)は。(と小ちいき呼吸いきす)何という涼しい、爽さわやいだ—

—蘇よみがえ生なまったような気がします。

公子 蘇生いのちったのではないでしょう。更に新しい生命いのちを得たんだ。

美女 嬉しい、嬉しい、嬉しい、貴方。私がこうして活いきていま
 すのを、見せてやりとう存じます。

公子 別に見せる要はありますまい。

美女 でも、人は私が死んだと思っております。

公子 勝手に思わせておいて可いではないか。

美女 ですから、ですけれども。

公子 その情愛、とかで、貴女の親に見せたいのか。

美女 ええ、父をはじめ、浦のもの、それから皆みんなに知らせなけれ

ば残念です。

公子 (卓テエブル子に胸を凭よせ出す) 帰りたいか、故郷へ。

美女 いいえ、この宮殿、この宝玉、この指環、この酒、この栄

華、私は故郷へなぞ帰りたくはないのです。

公子 では、何が知らせたいのです。

美女 だって、貴方、人に知られないで活きているのは、活きているのじゃないんですもの。

公子 (色はじめて鬱す) むむ。

美女 (微酔の瞼花やかに) 誰も知らない命は、生命ではありません。この宝玉も、この指環も、人が見ないでは、ちつとも価値がないのです。

公子 それは不可ん。(卓子を軽く打つて立つ) 貴女は栄耀が見せびらかしたいんだな。そりや不可ん。人は自己、自分で満足させねばならん。人に価値をつけさせて、それに従うべきものじゃない。(近寄る) 人は自分で活ければ可い、生命を保てば可い。しかも愛するものとともに活ければ、少しも不足はな

かろうと思う。宝玉とてもその通り、手箱にこれを蔵すれば、
宝玉そのものだけの価値を保つ。人に与うる時、十倍の光を放
つ。ただ、人に見せびらかす時、その艶は黒くなり、その質は
醜くなる。

美女 ええ、ですから……来るお庭にも敷詰めてありました、あ
の宝玉一つも、この上お許し下さいますなら、きつと慈善に施
して参ります。

公子 ここに、用意の宝蔵がある。皆、貴女のものです。施すは
可い。が、人知れずでなければ出来ない、貴女の名を顕し、姿
を見せては施すことはならないんです。

美女 それでは何にもなりません。何の効かいもありません。

公子 (色やや嶮^{けわ}し) 随分、勝手に云う。が、貴女の美しさに免じて許す。歌う鳥が囀^{さえず}るんだ、雲雀は星を凌^{しの}ぐ。星は蹴落^{けおと}ささない。声が可愛らしいからなんです。(女房に) おい、注^つげ。

女房酌す。

美女 (怯^{おそ}れたる内端^{うちわ}な態度) もうもう、決して、虚飾^{みえ}、栄耀^{えよう}を見せようとは思いません。あの、ただ活きている事だけを知らせとう存じます。

公子 (冷^{ひや}かに) 止^よしたが可^よかろう。

美女 いいえ、唯^{ただいま}今も申します通り、故郷^{くに}へ帰つて、そこに留^{とど}まります気は露ほどもないのです。ちよつとお許しを受けまして生命^{いのち}のあります事だけを。

公子、無言にして頭掉る。美女、縋るがごとくす。

あの、お許しは下さいませんか。ちつとの外出もなりませんか。

公子 さわやか（爽に）獄屋ではない、大自由、大自在な領分だ。歎くも

の悲しむものは無論の事、僅 きんしょう 少 うらい の憂あり、不平あるものさ

え一日も一個たりとも国に置かない。が、貴女には既に心を許

して、秘蔵の酒を飲ませた。海の果 はて、陸の終 おわり、思つて行かれな

い処はない。故郷 ふるさと ごときはただ一 ひとつ 飛 とび、瞬 まばたきをする間に行か

れる。 あわれ（愍むごとくしみじみと顔を視る）が、気の毒です。

貴女にその驕 おごりと、虚飾 みえの心さえなかつたら、一生聞かなくとも

済む、また聞かせたくない事だった。貴女、これ。

（美女顔を上ぐ。その肩に手を掛く）ここに来た、貴女はもう

人間ではない。

美女 ええ。(驚く。)

公子 蛇身になった、美しい蛇へびになったんだ。

美女、瞳みはを睜みはる。

その貴女の身に輝く、宝玉も、指環も、紅べに、紫うろこの鱗この光と、人間の目に輝くのみです。

美女 あれ。(椅子を落つ。侍女の膝にて、袖を見、背を見、手を見つつ、わななき震う。雪の指ゆびさき尖さき、思びんわず鬢びんを取つつて衝つと立ちつつ)いいえ、いいえ、いいえ。どこも蛇にはなりません。
一、一枚も鱗はない。

公子 一枚も鱗はない、無論どこも蛇へびにはならない。貴女は美し

い女です。けれども、人間の眼まなこだ。人の見る目だ。故郷に姿を
 顕あらわす時、貴女の父、貴女の友、貴女の村、浦、貴女の全国の、
 貴女を見る目は、誰も残らず大蛇と見る。ものを云う声はただ、
 炎の舌ひらめが閃く。吐く息は煙を渦巻く。悲歎の涙は、硫黄ゆうわうを流し
 て草を爛ただらす。長い袖は、腥なまぐさい風を起して樹を枯らす。悶もたゆる
 膚はだは鱗ならを鳴してのたうち蜿うねる。ふと、肉身のもの目に、その
 丈より長い黒髪くろかみの、三筋、五筋、筋を透すかして、大蛇の背に黒く
 引くのを見る、それがなごりと思うが可いい。

美女（髪みだるるまでかぶりを掉ふる）嘘うそです、嘘うそです。人を呪のろ
 って、人を呪のろって、貴方こそ、その毒蛇です。親のために沈ん
 だ身が蛇体になろう筈はずがない。遣やつて下さい。故郷くにへ帰して下

さい。親の、人の、友だちの目を借りて、尾のない鱗のない私の身が験たぬしたい。遣つて下さい。故郷くにへ帰して下さい。

公子 大自在の国だ。勝手に行くゆが可いい、そして試すが可よかろう。

美女 どこに、故郷ふるさとの浦は……どこに。

女房 あれあすこに。(廻廊の燈籠を指す。)

美女 おお、(身震みふるす)船の沈んだ浦が見える。(翻然ひらりと飛ぶ。

……乱くれないる紅、炎のごとく、トンと床を下りるや、颯さつと廻廊を

突切つつきる。途端に、五個の燈籠ひと齊しく消ゆ。廻廊暗し。美女、そ

の暗中に消ゆ一舞台の上段のみ、やや明あかるく残る。)

公子 おい、その姿見の蔽おおいを取れ。陸くがを見よう。

女房 困った御婦人です。しかしお可哀相なものでございます。

(立つ。舞台暗くなる。——やがて明あかるくなる時、花やかに侍女皆あり。)

公子。椅子に凭よる。——その足許あしもとに、美女倒れ伏す——疾とく既に歸り来きたれる趣。髪すべて乱れ、袂裂たもとけ帯崩る。

公子 (玉盞ぎよくさんを含みつつ悠然として) 故郷はどうでした。……どうした、私が云とつた通とおだろう。貴女の父の少わかい妾めかけは、貴女のその恐おそしい蛇の姿を見て氣絶した。貴女の父は、下男とともに、鉄砲をもってその蛇を狙ったではありませんか。渠等かれらは第一、私を見てさえ蛇体だと思おう。人間の目はそういうものだ。そんな処ところに用はあるまい。泣ないては不可いか。

美女悲泣ひきゆうす。

不可ん、おい、泣くのは不可ん。（眉を顰む。）

女房（背を擦る）若様は、歎悲むのがお嫌です。御性急でいらつしやいますから、御機嫌に障ると悪い。ここは、楽しむ処、歌う処、舞う処、喜び、遊ぶ処ですよ。

美女 ええ、貴女方は楽しいでしょう、嬉しいでしょう、お舞いなさい、お唄いなさい、私、私は泣死に死ぬんです。

公子 死ぬまで泣かれて堪るものか。あんな故郷に何の未練がある。さあ、機嫌を直せ。ここには悲哀のあることを許さんぞ。

美女 お許しなくば、どうなりと。ええ、故郷の事も、私の身体も、皆、貴方の魔法です。

公子 どこまで疑う。（忿怒の形相）お前を蛇体と思うのは、人

間の目だと云うに。俺おれの……魔……法。許さんぞ。女、悲しむものは殺す。

美女 ええ、ええ、お殺しなさいまし。活いきられる身体からだではないのです。

公子（憤然として立つ）黒潮等は居おらんか。この女を処置しろ。

言下に、床板を跳ね、その穴より黒潮騎士、大おお 錨いかりをか

ついであらわで顕る。騎士二三、続いて飛出づ。美女を引立て、一の

騎士が倒さかしまに押立てたる錨いましに縛む。錨の刃越はぎしに、黒髪の乱るる

を搔かいつか 掴んで、押仰向おしあおむかす。長槍ながやりの刃、鋭くその頤あぎとに臨

む。

女房 ああ、若様。

公子 止めるのか。

女房 お床が血に汚れはいたしませんか。

公子 美しい女だ。花を撈むしるも同じ事よ、花片はなびらと蕊しべと、ばらば

らに分れるばかりだ。あとは手箱てばこに蔵しまつておこう。——殺せ。

(騎士、槍を取直す。)

美女 貴方、こんな悪魚きばの牙いは可厭いやです。御卑怯おひきような。見ていな

いで、御自分でお殺しなさいまし。

(公子、頷うなずき、無言にてつかつかと寄り、猶予ためらわず剣つるぎを抜き、颯さつと目に翳かげし、衝つと引いて斜ななめに構かまう。面おもてを見合す。)

ああ、貴方。私を斬きる、私を殺す、その、顔のお綺麗さ、気高
さ、美しさ、目の清すずしさ、眉の勇ましさ。はじめて見ました、

位の高さ、品の可よさ。もう、故郷も何も忘れましました。早く殺して。ああ、嬉しい。(莞爾にっこりする。)

公子 解け。

騎士等、美女を助けて、片隅のに退く。公子、劍つるぎひつきを提ひげたるま

ま、

こちらへおいで。(美女、手を曳ひかる。ともに床のぼに上る。公子

劍を軽く取る。)終生ちしかを盟あおう。手を出せ。(手首を取つて刃

を腕かひなに引く、一線の紅血こうけつ、玉盞ぎよくさんに滴る。公子返す切尖きつさきに自

から腕を引く、紫の血、玉盞に滴る。)飲め、呑もう。

盞さかずきをかわして、仰いで飲む。廻廊の燈籠一斉ともに点り輝く。

あれ見い、血を取かわして飲んだと思うと、お前の故郷くにの、浦

の磯いそに、岩に、紫と紅あかの花が咲いた。それとも、星か。

(一同打見る。)

あれは何だ。

美女 見覚ええました花ですが、私はもう忘れしました。

公子 (書を見つつ) 博士、博士。

博士 (登場) ……お召。

公子 (指ゆびさす) あの花は何ですか。(書を渡さんとす。)

博士 存じております。竜胆りんどうと撫子とこなつでございます。新夫人にいおくさま

の、お心が通いまして、折からの霜しもに、一際色が冴さえました。

若様と奥様の血おもかげの梯はしでございます。

公子 人間にそれが分るか。

博士 心ないものには知れますまい。詩人、画家が、しかし認め
ますでございましょう。

公子 お前、私の悪意ある呪詛のろいでないのが知れたろう。

美女 (うなだる) お見棄みすてのう、幾久しく。

一同 —— 万歳を申上げます。 ——

公子 皆、休息をなさい。(一同退場。)

公子、美女と手を携えて一步す。美しき花降る。二歩す、フ
ト立停たちどまる。三歩を動かす時、音楽聞ゆ。

美女 一步ひとあしに花が降り、二歩ふたあしには微妙かおりの薫、いま三あしめに、

ひとりでに、楽しい音楽の聞えます。ここは極楽でございませ
か。

公子 ははは、そんな処と一所にされて堪^{たま}るものか。おい、女の行く極樂ゆに男は居らんど。よろい（鎧よろいの結むすび目を解むすきかけて、音楽につれて徐おもむろに、やや、ななめに立ちつつ、その竜の爪を美女の背にかく。雪の振袖、紫の鱗の端ほのかに仄ほのかに見ゆ）男の行く極樂に女は居ない。

——幕——

大正二（一九一三）年十二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海神別荘

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>